

高山町並調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

高山の古い町並がどのように形成され、変化し、現在に至っているかを明らかにするとともに、現在の町並の特色を把握することを目的とした町並調査を行った。調査は主に当研究所があたり、文化庁建造物課が加わるとともに、岐阜県・高山市の両教育委員会が協力した。

調査地区は、上一之町・上二之町・上三之町・片原町で、上三之町の南にある恵比須台組を中心に調査した。調査は恵比須台組の平面図・立面図を作成するために、各戸の実測調査を行った。また町並景観の歴史的变化を知るために各戸の正面復原調査を行った。この他に高山の町屋の変遷を知るために、恵比須台組7棟、その他の地区で11棟の町屋について詳細な調査を行った。調査地区全体について時代別・構造体別・階高別・用途別・商業別などの建物分布図を作成した。

調査地区は天保3年(1832)に大火に見舞われていて、調査した約40棟はみなこの大火後の町屋遺構である。そのうち10棟は江戸末期、他は明治以降の建設である。町屋は、片側に通り土間をもつ町屋特有の平面で通り土間を南側に通す。間口が広くなると部屋数は増え、定まった配列がある。間口が6間以下の町屋では2階の裏手に「ざしき」がある。

町屋正面は、庇高・軒高が揃っていること、正面の格子、庇の腕木や構造に特徴がある。平屋建を除くと、軒高は明治末期頃まではあまり高くならず、これ以後2階部分の階高が高くなってゆく。昭和初期になると庇の高さや構造が変化し、新しい様式として定着する。そして最近の建物は一階・二階とも高くなり、以前のプロポーションとは異った建物となる。一方一階正面の柱間装置は、入口は大戸、その他は「シトミ」であった。大型の町屋では江戸末期から「みせおく」には出格子を設けるが、一般的には明治中期頃から、「シトミ」は次第に格子に

第2図 高山町並

第3図 高山町並復原図

変ってゆく。「みせ」には割付の粗い格子、「みせおく」には密な格子を用いる。町屋の正面の変化をみると、昭和初期頃までは伝統的な様式を保持し、格子が一般的になっている。現在みるとことの出来る高山の町並景観は天保3年の大火に基礎づけられ、その後の変化を経て、明治末期頃から昭和初期の景観を保持していると言えよう。

調査地区全体の様子について、時代別分布図からみれば、上三之町、上二之町北半部、上一之町北半部、片原町が江戸末期～昭和初期の建物が集中している地区である。構造別、階高別分布図と時代別分布図を重ねてみると、木造・中2階の建物分布と前記集中地区はほぼ一致している。とくに恵比須台組では、ほとんど一致し、この町並景観が統一感を持っていることを知ることができる。用途別分布図では、上三之町に商賣が集中していて、しかも観光客を相手とする店が多い。町並景観を維持している地区は観光客が訪れ商賣が成立つこと、逆に観光客が魅力を持つよう町並景観を維持することの両者が影響し合っている事情がわかる。

(上野邦一)